

文献からみた中世の土器と食事

Medieval Pottery and Meals from a Perspective of Written Sources

脇田晴子

- ①はじめに
- ②鎌倉期にいたる天皇家の食器に見られる意識
- ③武家の土器文化
- ④公式の儀式的食事の変遷
- ⑤一般の酒宴の「かわらけのもの」など
- ⑥おわりに

【論文要旨】

中世考古学の発展は、公式の貴族はいうに及ばず、庶民階層までいたる輸入陶磁器の受容をあとづけて、衝撃をあたえたが、次に土器の大量投与の発掘によって、土器の一面でもつ儀礼的役割をあとづけた。本稿の目的はそれらの研究に触発されて、土器の持つ儀礼性のもつ意味、文化系譜などについて文献から探り、なおかつ、土器の用途のあり方を幾分か、明らかにすることによって、考古学発掘による土器の研究との接点を作りたいという願望に他ならない。

考察した結果は、はじめに天皇を頂点とする文化影響を予想したのとは違って、土器を正式食器とする文化は、天皇・皇族とは特に関係なく、天皇家の食器は、延喜式段階から中世を通じて、近世にいたるまで、金銀器、銀器を基本としていた事がわかった。土器は「阿末加津土器」以外を除いては、漆器・瓷器の代用品であった。天皇家はいわば、律令の伝統の中国を基準とする文化意識の体現者であった位置を、中世・近世にももっていたといえよう。「式三献」以下の足利幕府の「武家」を中心とする儀礼の発達は、蔵人所滝口の侍の儀礼に根ざし、鎌倉幕府の大盤に淵源をもっていることがわかった。いわば、王朝国家の侍の伝統の上になつて、その儀式的肥大化がなされたといえよう。その儀式やそれにとまなう饗宴の盛行のなかで、土器の使用も逆に盛大化していくと考えた。いわば、王朝国家以来の身分意識に立っていたと言える。神道に代表されるような清浄性が原理だとは考えられないのである。

残された問題は、寺社の神事、八幡宮放生会などにおける土器の使用の意味である。これが古代からの呪術的意味をもつ「阿末加津土器」の意味の拡大なのかどうかはわからない。ここでは問題として残しておきたい。